

42名日本反战人士来哈唱响紫金草的故事，为日中不再战歌唱

哈尔滨日报 昨天

10月6日

戦争に反対する42名の日本人たちがハルビンを訪れ、日中不再戦の願いを込めて「紫金草物語」の歌声を響かせた 昨日 (ハルビン日報デジタル版に大々的に報道さる!! 昂広報部)



ハルビン日報記者 張巍文/撮影/ビデオ映像

(以下の中国語の日本語訳: 深井文昭氏)

10月6日午後3時、黒龍江省歌舞劇場音楽ホールで、日中友好交流合唱団、ハルビン群星合唱団、ハルビン小白鳩児童合唱団による中日友好交流コンサートが予定通り開催されました。日中友好交流合唱団は42名編成で、メンバーは日本各地からやって来ており、平和と音楽を熱烈に愛し戦争に反対する人びとです。彼らが創作した反戦組曲『紫金草物語』はこれまで何度も中国の北京、上海、南京、ハルビンなどの地で歌われました。

10月6日 15時、在省歌舞剧院音乐厅，一场由日中友好交流合唱团、哈尔滨群星合唱团、哈尔滨小白鸽童声合唱团共同演出的中日友好交流演唱会如期举行。

日中友好交流合唱团由42人组成，成员是来自日本各地的热爱和平和音乐的反战人士，他们创作的反战组曲《紫金草物语》，曾多次在中国的北京、上海、南京、哈尔滨等地唱响。





演出前，记者在后台见到了 89 岁的藤后博巳，老人用流利的东北话对记者说：‘我的年龄越来越大了，感觉时间越来越紧迫，我必须抓紧一切时间，在有生之年把‘日中不再战’的信念宣传出去，以和平的名义为爱歌唱。’

演奏の前に、記者は楽屋で 89 歳の藤後博巳さんにお会いしました。このお年寄りは、流暢な中国語の東北方言で、次のように記者に語りました。「私はどんどん年を取っていく。残り時間もいよいよ少なくなってきたと感じている。一切の時間を無駄にしたくない。生きているうちに『日中不再戦』の信念を広く宣伝し、平和を掲げて愛のために歌うのです」。

这是日中友好交流合唱团第三次来哈交流演出，文化交流的背后有着一段鲜为人知的关于那场战争和紫金草的故事——

1943 年，14 岁的藤后博巳还是初中生，被老师动员参加了“满蒙开拓青少年义勇军”，抱着要建设“满洲国”的想法来到中国。可他到了中国后才知道，“满蒙开拓青少年义勇军”就是日本关东军预备队，随时会被补充到军队里。藤后博巳在哈尔滨新香坊的训练营受训还未结束，日本就宣布投降了。训练生被拘留在牡丹江的日军收容所，苏联红军准备带他们去西伯利亚。藤后博巳因为年龄小又得了传染病，就被人用担架抬回哈尔滨训练营。



これ（写真）は日中友好交流合唱団の3回目のハルビン公演のもので、文化交流の背景にあるのは、ほとんど人に知られていない、あの戦争と紫金草に関する物語です。

1943年、14歳の藤後博巳さんはまだ中学生で、教師の勧めで「満蒙開拓青少年義勇軍」に参加し「満州國」を建設しようという思いを抱いて、中国にやって来たのです。しかし中国に着いてから知ったのは、この「義勇軍」というのは日本の関東軍の予備部隊であり、いつでも軍隊に補充されるのだということです。藤後さんがハルビンの新香坊という所の訓練所で訓練を受けている最中に、日本は投降を宣言しました。訓練生が牡丹江（ばたんこう）の日本軍収容所に拘留された時、ソ連赤軍が彼らをシベリアに連れていくとしました。藤後さんはまだ小さかった上、伝染病にもかかっていたため、担架に担がれてハルビンの訓練所に戻されました。

“那时留在哈尔滨的日本人贫病交加，训练营里没有粮食，我流浪到道外被一个开餐馆的王老板收留，他给我取了个中文名字叫滕东升。病好后，我就留在饭馆工作，还学会了中文。”藤后博巳回忆说，1980年他曾回过哈尔滨，曾去找过那户人家，但没找到，这成为他终生的遗憾。

抗美援朝战争结束后，中断许久的“日本人归国”重新启动。“1955年2月，我在天津港踏上‘興安丸’号归国船。回归祖国对我来说无比激动，但是对于在中国生活多年，跟着中国军人一起出生入死了8年的我来说，又充满了不舍。少年的我本应在祖国好好读书，却被无情地卷入战争的洪流，战争对于中日两国人民来说都是灾难。”

藤后博巳回国后便致力于日中友好交流，他加入了“日中友好协会”，一直从事反战宣传，组织和参加过多次战争真相讲座和请愿游行，并组建日中友好民间合唱团，专门创作和演唱日中不再战的反战歌曲。藤后博巳说，合唱团的成员都是自愿加入，大家利用业余时间排练。团员中有许多人的父辈也是那场战争的受害者，他们要用歌声传唱和平，促进中日文化交流。

近年来，藤后博巳带领日中友好民间合唱团先后10余次到北京、上海、南京和哈尔滨进行文化交流活动。合唱团的保留曲目《紫金草的故事》就是为纪念那场战争而创作的。他说，在南京紫金山上有一种野花叫紫金草。南京大屠杀时，一名日本军医因不忍日军的残暴行为被部队革职遣返回国。回国前，他在紫金山上采集了在战争废墟上仍倔强开放的紫色草种子，带回日本。他把紫金草的种子种在自家院子里，之后的20年里，他每年都会坐火车沿路抛撒紫金草种子。在1985年筑波世界园艺博览会上，这名日本军医的儿子和志愿者们向参观者分送了100万包紫金草种子，将紫金草传遍世界。《紫金草的故事》就是根据这个故事创作的。

90岁的藤后博巳仍在为和平奔走。他说：“现在日本有意将那场战争的历史从教科书中大量删减。我们唱反战歌曲，就是要让人们知道，在日本也有像我们这样爱好和平的人存在。我们要让更多的日本年轻人了解那段历史，用歌声怀念死难者，用歌声传达人们爱好和平的心愿！作为‘半个中国人’我一直坚持着一个信念，就是拼了这把老骨头，也要组织爱好和平的日本民众，将反战进行到底，以和平的名义歌唱！”

编辑 张春杰

值班主编 杨明

「その当時、ハルビンに留まっていた日本人は貧困と病気の二重苦に迫られ、訓練所には食料もありませんでした。私が流れ着いた先は『道外』というハルビンの下町で、料理屋を開いていた店主の王さんに、引き取られ世話をもらったのです。彼は、私に“滕東昇（滕東昇）”という中国語の名前をつけてくれました。病気がよくなつてから私は料理屋さんに残つて働き、さらに中国語も身につけました」。藤後博巳さんは思い出を追うように語ります。1980年、彼はハルビンに行って、王さんを捜したことがあったが、見つけられなかつた。このことは、彼が生涯、残念に思つてゐることだ。

抗米援朝戦争（朝鮮戦争）後、久しく途切れていた“日本人の帰国”が再び動きだした。「1955年2月、私は天津港で“興安丸”という帰国船の船上にいました。祖国に帰るということは私にと

って、この上ない感激でしたが、長い中国での生活や、中国の軍人たちと生死を共にした8年間は、また離れがたい感情でいっぱいになったものです。少年だった私は、本来なら、祖国日本で、しっかり勉強ができたはずだったのに、容赦なく戦争の大きな流れに巻き込まれたのだ。戦争というものは、中日両国の人民にとっての災難なのだ」。

藤後博巳さんは帰国後、日中友好交流に力を尽くす。日中友好協会に入り再び戦争をしてはならないとずっと活動を続け何度も、戦争の真相を語る会やデモ行進を組織し参加してきた。さらに日中友好民間合唱団をつくり、日中不再戦の反戦の歌を特別に創作し歌ってきた。藤後さんは言います。合唱団のメンバーは自らすすんで入団し、余暇を使って練習する。団員のなかには、父親の代に戦争被害者が多くいます。彼らは歌声を通して平和を歌い継ぎ、中日の文化交流を推し進めています、と。

近年、藤後博巳さんは日中友好民間合唱団を率いて、相次ぎ10数回、北京、上海、南京、ハルビンで文化交流活動をすすめてきた。合唱団のレパートリー曲『紫金草物語』はあの戦争を忘れないために創作したものだ。藤後さんは言います。南京の紫金山に紫金草という野生の花があった。南京大虐殺の時、一人の日本人軍医が日本軍の残虐行為に耐えられなかつたことから、部隊を免職され日本に送還された。帰国前、戦争の廃墟の上にも変わらず咲いていた紫色の草の種を、紫金山で採集した。日本に持つて帰つてその種を自分の家の庭に植えて20年間。彼は毎年、列車に乗りあちこちの沿道に、紫金草の種を撒きました。1985年筑波世界園芸博覧会で、この日本の軍医の息子とボランティアの人たちが参加者にこの種を100万袋配り、紫金草があまねく世界に広まつたのです。『紫金草物語』という歌は、この話にもとづいて創作された作品なのです。

90歳になろうという藤後博巳さんは、いまも平和のために奔走されています。彼は言います。「いま日本ではあの戦争の歴史を、教科書から故意に大幅に削ろうとしている。私たちが戦争反対の歌を歌うのは、日本にも私たちのように平和を愛する人がいることを知つてもらいたいからです。私たちはもっと多くの日本の若者たちにその歴史を知つてもらわなくてはならないし、歌声で犠牲者を偲び、歌声で平和を愛する人たちの願いを伝えなくてはいけない。『半分は中国人』としての私は、ずっと信念を持ち続け老骨に鞭を打つて、平和を愛する日本の民衆を組織し、とことん戦争反対を貫き、平和のために歌を歌い続けるのです！」。

編集：張春傑

担当編集長：楊明

既報（「昂ニュース666号」）のとおり、「日中友好交流合唱団（うたごえ有志）」のハルビン公演の模様が10月6日の「ハルビン日報」電子版で大きく報道されたことはお知らせしましたが、今回の「友好の旅」に参加された深井文昭さんに、日本語への翻訳を依頼しましたところ、詳細で正確、格調高い日本語に訳していただきました。ご友人の中国人の方にも見ていただけたとのこと、ありがとうございました。（「昂ニュース」編集子）

健康手帳 ②-2

『体温低下の理由』

2 ストレスによる血行不良

働いている人はもちろんのこと、そうでない人でもそれぞれの置かれている状況に応じて、何かとストレスがたまります。ストレスがたまると、自律神経の働きにより、緊張のホルモンであるアドレナリン等の分泌が高まり、血管が収縮して血行が悪くなり、やがて体温が下がります。スポーツで勝ち負けを競うなどの適度なストレスならむしろ必要なのですが、強いストレスがかかると、後で詳しく見ていくうと思いますが、交感神経の緊張状態が続き、体が冷え、免疫力が低下し、ガンに至るなど体に様々な悪影響をもたらすことが、新しい免疫学の進展でわかつてきました。強いストレスを避けるには、自らの生活を見直すことが重要だということが見えてきます。

3 お手軽すぎる入浴法

「面倒だから」「時間がかかるから」と、シャワーだけで入浴をすませていませんか？また、「夏は暑いからシャワーだけ」というケースも少なくありません。実は、これが体を冷やす大きな原因になっている、と石原医師は指摘します。

湯船にきちんとつかれば、全身の血行が良くなり、臓器や細胞の新陳代謝が促されます。湯船にしっかりとつかれば、発汗量もかなり増えます。これが冷えの一因となる体内の余分な水分を排泄し、体温上昇を促すことにつながるのです。

どんなに熱いシャワーを浴びても、冬場は脱衣所に出るとブルッと体がふるえますが、湯船にしっかりとつかった後は、体がポカポカしてしばらく裸でいても平気なものです。入浴は殆ど毎日のことですから、この違いは大きいのです。特に「冬場は足腰が冷える」「ストレスでゆううつ」などの陰性のトラブルを改善したい人は、「毎日湯船につかって汗を出す」を実行しましょう。寝つきもよくなり、翌朝すっきり目が覚めます。

4 食べすぎ

人間は、ものを食べたり飲んだりしない方が頭が冴え、仕事や家事、趣味などに集中できるものです。「腹が減っては戦ができない」などと途中でご飯をたらふく食べたりすると、その後いきなりやる気がなくなったり、ペースダウンすることがよくあります。

これは、胃腸の働きをよくするために、血液が胃腸の壁に集中して流れ込むため、結果、脳や筋肉へ配給される血液量が減り、体熱が低下してしまうからなのです。

体熱の低下は様々な病気を誘発する原因になります。特に現在療養中の人は、持病のある人などは、食べすぎるとなかなか病気が治りません。食事量を少なくして、胃腸以外の臓器への血流を促しましょう。

「体を冷やす食品」ばかり食べるのも体温低下の大きな原因の一つです。果物でいうなら、バナナやパイナップルなどは、すべて体を冷やす陰性の食べ物です。自分の国や地域の物でない物、季節外れの物をたっぷり吃るのは控えましょう。

(山本宏司)